

## 「先島でよかったね」と言わせないために

2017年5月2日 FB ページに投稿



I LOVE いしがき HP



I LOVE いしがき FB

八重山毎日新聞 5月2日付コラム「不連続線」です。

**不連続線**

安倍政権の閣僚や政務官などの失言・暴言、不祥事が止まらない。震災が「東北でよかった」と暴言を吐いたのは、このころであろうに今村復興大臣。当然、辞任だ。東日本大震災から6年、復興大臣辞任はもう4人目。これでは被災者に寄り添った復興が進むわけがない▼政権の本音が透けて見える。被災地の犠牲の上に国の繁栄があったてはならないのに、寄り添うのは言葉だけ。地方を軽んじ経済成長のみ追い求める政治の劣化。一極集中、あまりもの東京偏重の発想は何か▼日本地図上に原発立地を記せば興味深い。ほぼ戊辰戦争の賊軍の諸藩。九州では官軍ながら反乱や西南戦争の佐賀と鹿児島。中央から遠い地だ▼さらに遠い沖縄は、日米安保米軍基地負担を一身に背負わされ米兵による事件事故が絶えない。さまざまな補助金漬けで地方を危険にさらし、東京が安全と繁栄を享受する差別的な論理の美しい国▼メルトダウンが、オスプレイ墜落が東京だったら。新基地建設が東京湾だったら。どう問いかければこの国は目覚めるか。辺境の八重山からは見えているのに▼沖縄県民に寄り添うも政権のうそだ。辺野古で埋め立て工事が始まった。こんな寄り添い方があるか。もういいかげんだまされるのをやめませんか。明日は戦争放棄を定めた憲法記念日。(慶田盛伸)

2017年5月2日

さすがに、「東北でよかった」発言で、今村元復興大臣は辞任させられましたが、おそらく、彼が言ったことは政府・与党幹部の本音なのでしょう。「過疎の歯止め」や「雇用の機会」をエサに、「賊軍諸藩」の自治体に原発受け入れを強制したくせに。

同じ人たちが、「救急患者を緊急搬送してもらえる」とか、「大災害の時助けてくれる」とか、「経済効果がある」などと、さも「離島苦」の解消に役立つように言って、先島住民に陸自ミサイル基地を受け入れさせようとしています。でも、それで何かが起きて被害が出たら、きっと、「あれが先島でよかった」と言うのでしょうか。

では、どんなことが起きるのか？心配なのは、東シナ海で武力衝突が生じた時、先島の軍事施設がミサイル攻撃を受けることです。例えば、次のような事態が考えられています。

「中国第二砲兵（戦略ロケット軍）は、南西諸島に所在する日本の基地・レーダー・地对空ミサイルなどの機能低下・能力喪失を狙いとして SRBM・MRBM・SLBM 等の弾道ミサイルなどを発射する。引き続き、中国空軍は揚陸艦及び輸送機などによる着上陸作戦を安全・容易に実施するために、戦闘機を随伴した爆撃機、戦闘爆撃機が、南西諸島に対する爆撃を実施する。そして、水上戦闘艦艇群による防御を得た上陸部隊の中国軍が、尖閣に上陸を開始する。」 (p. 43-44)

【ここで、SRBM、MRBM、SLBM は、短距離、中距離、潜水艦発射弾道ミサイルのこと】

「中国からの弾道ミサイル攻撃は、北朝鮮に近い吉林省と台湾正面の福建省・浙江省の二方向から発射されるために、イージス艦を二正面に配備しなければならず、空中ですべてを撃破することは難しい。このため、日本の BMD を突破した弾道ミサイルや巡航ミサイル攻撃に対して、戦闘機による飛翔ミサイルの直接破壊及び基地防空火器、特に短 SAM に

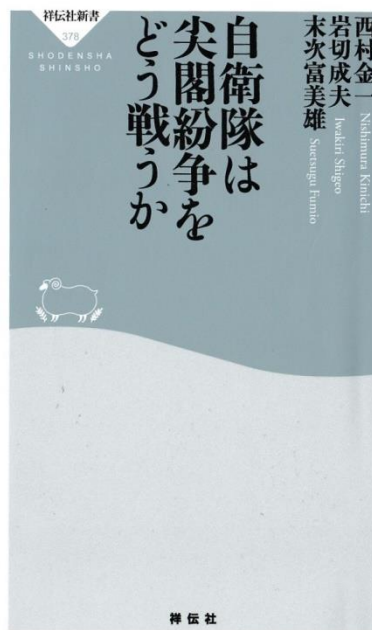
よる積極的な防衛と、在地にある戦闘機などの空中退避や人員退避、隠蔽掩蔽による被害局限策と堅固な基地防御措置などの消極的な防衛の双方で対処する。」(p. 52-54)

【ここで、BMD は、弾道ミサイル防衛、短 SAM は、短距離地对空ミサイルのこと】

これは、西村金一、岩切成夫、末次富美雄という自衛隊の元幹部3氏の共著による「自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか」(祥伝社新書 2014年刊)という本に書かれていることです。引用した文章は、括弧で示したページにあります。著者達は、国防強化のために、「敵基地攻撃能力の保持」、「奄美、沖縄、宮古、石垣などの島嶼への部隊配備と作戦根拠地の保持」(p. 87)、「憲法第9条の改正」(p. 88)などを主張しておられる、政府・防衛省寄りの方々です。西村さんは、テレビの報道番組などにも登場しているので、ご存知の方も多いでしょう。ですから、上の文章は、決して、住民の不安を煽ることを意図したものではありません。あくまでも、軍事の専門家として、おそらくは現役時代の研究や図上演習を参考にして、起こり得る尖閣武力紛争をシミュレーションしたものです。

ですが、この本を住民の目で読めば、島にミサイルなど軍事施設を置いたら、どんな運命が自分たちを待っているかは明かです。

東シナ海の軍事衝突はこうして起きる。このように進む。尖閣諸島をめぐる中国の動向は、今や国際的にも注目されている。中国艦艇の射撃管制用レーダー発射機、中国機の異常接近飛行は、自衛隊への意図的な威嚇であり、一触即発の事象であった。一歩間違えれば、交戦である。東シナ海で日中の軍事衝突となれば、最新兵器の長射程のミサイルを相互に打ち合う、人類がまだ経験したことのない戦いとなる。空でも、海上でも、また海中からも、ミサイルの応戦となるのだ。本書は自衛隊の幹部であった陸・海・空の軍事専門家が知りえた軍事知識を駆使して想定した、日中交戦のリアルな作戦図である。



自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか  
西村金一 岩切成夫 末次富美雄

9784396113780

1920231008004

ISBN978-4-396-11378-0  
C0231 Y800E

定価：本体800円＋税

西村金一

1952年生まれ。法政大学卒業後、第1空挺団、幹部学校指揮幕僚課程修了。防衛省・統合幕僚部・陸上自衛隊・情報本部の情報分析官を務め、第10師団司令部長、幹部学校情報学部長、退官後は軍事アナリストとして各種委員会に活躍。

岩切成夫

1952年生まれ。防衛大学校卒業。大韓民国防衛駐在官、第8航空団飛行団司令、航空団司令部防衛部長、航空団隷属部長を務める。退官後は航空作戦、安全保障戦略等の専門家として活躍。「現代用語の基礎知識」の(防衛)を共同執筆。

末次富美雄

1955年生まれ。防衛大学校卒業。護衛艦「しらね」主任、「あきども」艦長を経て、シシマ海一掃隊隊長に任官。第2、第63及び第5機動艦司令、海上自衛隊情報業務部司令。退官後は海上作戦、情報戦等の専門家として活躍。「現代用語の基礎知識」の(防衛)を共同執筆。

祥伝社新書  
378

陸自ミサイル基地を受け入れてはなりません。あとで「先島でよかったね」などと言わせないために。

この本のもう少し詳しい紹介は、I Love いしがき ホームページの「知ってる？」の「フェイスブックへの投稿」にあります。

<http://loveishigaki.jp/ar.../FBposting/battlearoundSenkaku.pdf>